

# 生きるための大学

牧野 篤  
(東京大学大学院教育学研究科)

# 1. いきづらい若者たち

「私の周りには、自分を大切にできない子が多くいます。例えば、タバコの火を肩におしつけて、それを快感に見せてくる子、不登校が重くなり保健室に登校する子、恋愛に飢えて様々な人と性的関係を持ち、泣いて相談してくる子……その中でも、高校一年生の頃から七年来の友人で、リストカットを一〇〇回以上繰り返す子との関係の持ち方については、講義を通して振り返り、今後のつきあい方について、考えさせられました。」

「その子は、中学校の頃のいじめがトラウマになって、高校一年の夏から不登校になりました。人格が解離して、突然言葉遣いが悪くなったり、幼児に戻って「何でお化粧するの？幼稚園でしょ」などと言ってきました。その後、つきあっていた彼氏とも病気が原因で別れ、さらに荒れました。保健室登校まで何とかもってこれて、私は彼女と昼お弁当を外へ食べに行っていました。私たちが、卒業すると同時に、彼女は学校を辞めました。」

「先生は授業で僕たちの関心を高めようとしたり、興味を持たせようとして一生懸命みたいですけど、なんていうのかな、テレビでお笑い芸人が視聴者を笑わせようと躍起になっているのを、飯食いながらぼーっと見ているのと、あまり変わらないんです。別に先生の授業がつまらないとかそんなことじゃなくて、自分に語りかけられていないっていうか……。僕だけを相手にしてくれているのではないっていうか……。だから、どうでもいいっていうか。そんな感じですよ。」

「テキスト、どうせ読んでもわからない、というよりも、テキストは読んでいるのではなくて、見ているだけという感じなのです。どのようなことが書いてあるのか、自分が続いていかないから、よくわからないんです。気がつくと、本とは違う世界にいついていて、慌てて戻るんですけど……。だから、とびとびなんです、理解が。でも、本を見て、自分の意見をもっているということが大事なのですよね。」

「本って、なんていうのかな、  
読むものというよりは、バツと  
写真に写すみたいに見て、そこ  
から飛び飛びに単語をひろって、  
自分の考えていることに合わせ  
て、意味をとっていくもの、と  
いう感じなのかなあ。書いてあ  
ることを理解するって、そうい  
うことなんじゃないですか。全  
部読めっていわれても、できな  
いですよ。そんなこと。」

自己責任の沼に沈み込む

将来「貧者」になる不安  
ある50パーセント  
ない50パーセント

「格差社会がどんどん広がり、世間は人を勝ち組、負け組という分け方をはじめた。若者は、自分たちなりにそれを解釈し、将来に不安を覚えているのだ。このままだと、自分はどうなってしまうのか、どうしなければならないのか、よくわからない。だけど何とかしないと自分も負け組になってしまう。だから、自分より下の人を見つけ「こいつよりマシだ」とか「自分の方が上だ」という優越感で自分をなぐさめている。」



## 「貧者」となること

社会環境的によって貧者になってしまう

→それは、貧者の「資質」になってしまうこと

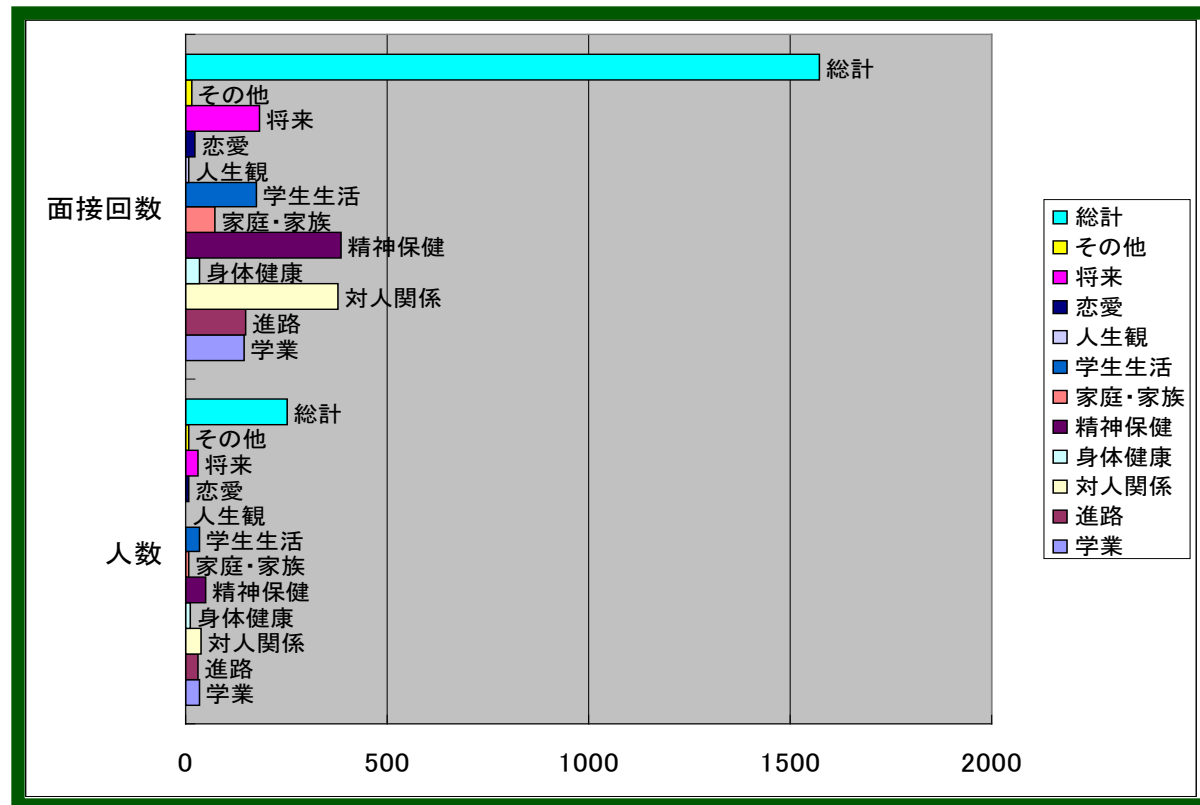
→だから、自分は「貧者」になるかも知れない

→だから、自分は「貧者」にはならない

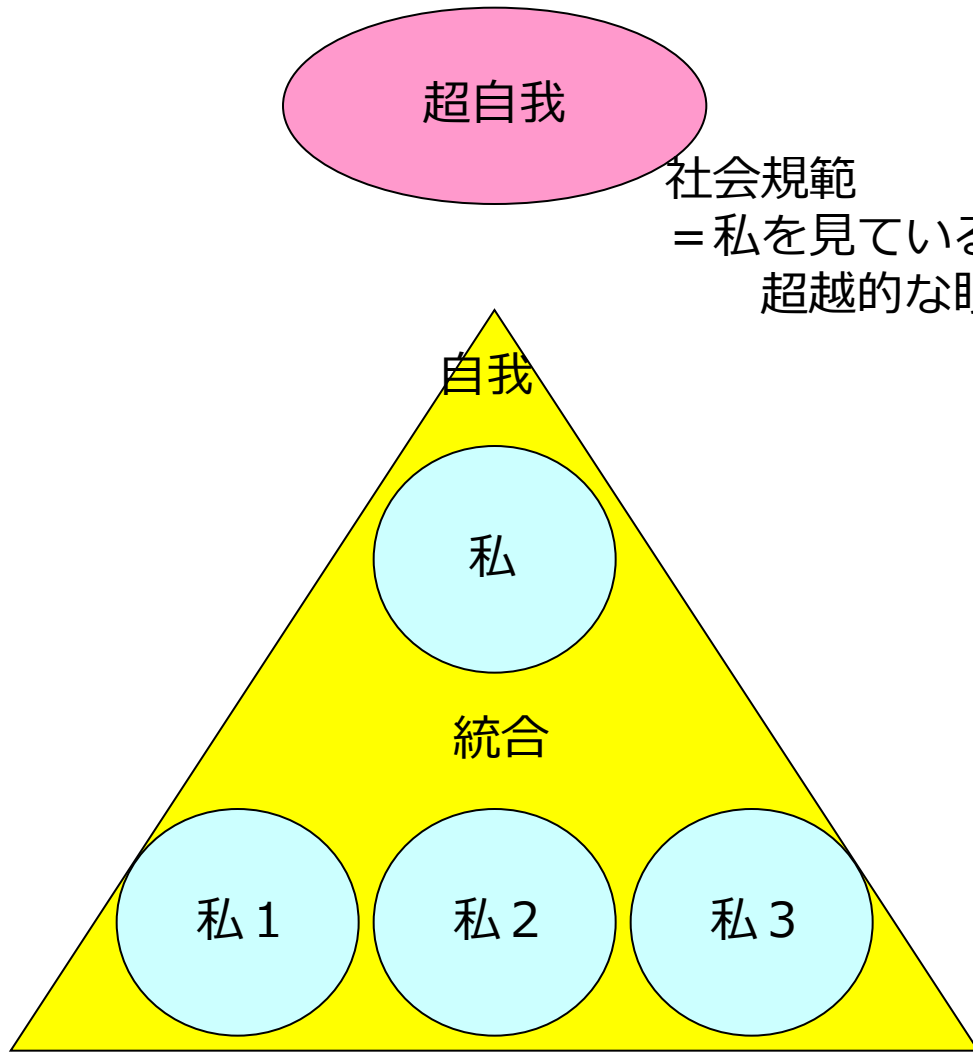
すべては、なってしまった／なってしまう自分が悪い

## 2. 新しい〈自我〉が始まっている

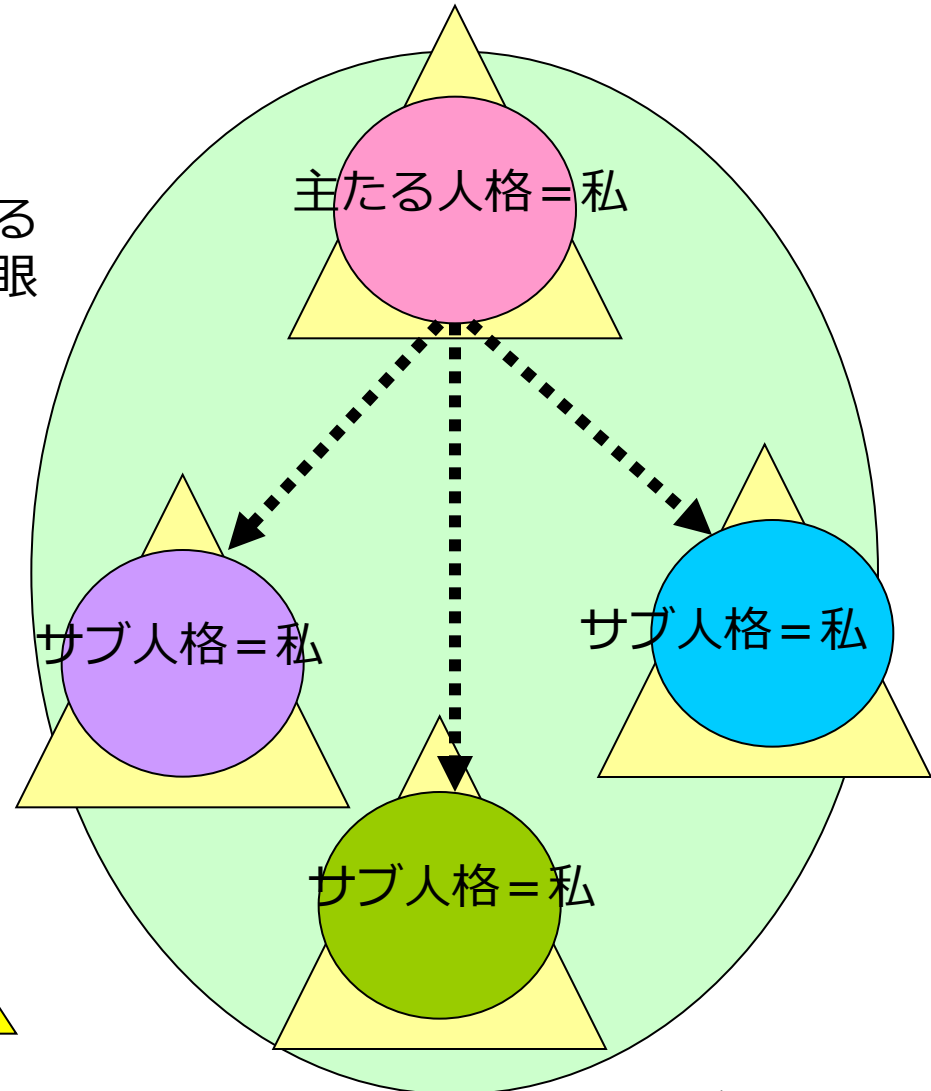
来談者相談内容



# <解離>のイメージ図1

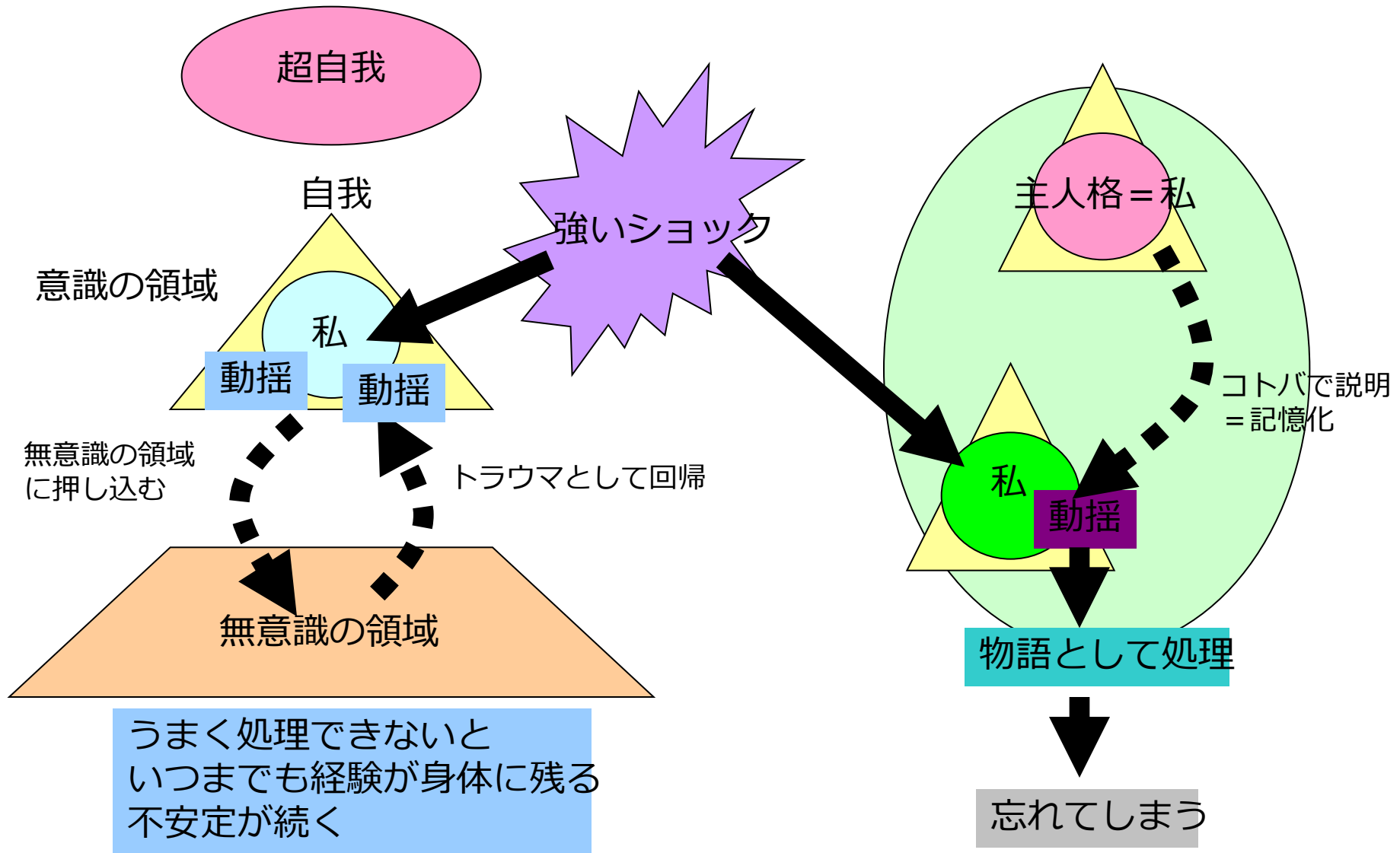


多重な私は一つの自我に統合されている



言語的に記述できる完結態  
= 相互に独立・不干涉

## <解離>のイメージ図2



\* どこかで「運命的な」出会いを待っている。

自分では「夢」を追っていると言うが、「夢」を与えられることを待っている

\* 自分は何もしない。誰かが自分の本当の姿を見出してくれると待っている

天命的な命令を待っている

「天職」をさがしている

\* 誰かに強く認められたい。お前は人とは違って、「すごい」のだといわれたい

\* 自分でアプローチするのではなく、待っている

(恋愛も、「出会い系」で待っている)

→乳児的な保護を望んでいる = すべては自分が世界の中心で、  
自分は何でもやってもらえるという「全能感」をもっている  
社会的な保護のない「全能感」が自己否定を引き起こす = 自己愛的

- \* バラバラな人格が統合されない = 乳幼児の状態
- \* このバラバラな人格をデータベース化して管理する社会へ
  - = <データベース社会>
  - = この社会では、<自我>は必要ない
    - 個々の人の<器官>がデータベースとして登録・管理
  - = 人々は<器官>への働きかけを受けて、自らの選択行動をとる
- \* 自立した<自我>は必要ない社会へ
- \* <自我>を統合していた<私>という感覚 = 身体感覚は薄れる社会へ
- \* 子どもたちは<カラダ>に飢えるようになる
  - = 生きている実感を失う
  - = 「なぜ、命を殺してはいけないのか」
  - = 人を殺すとどんな「感じ」がするのか「知りたい」（感じているのではなく、「知る」ことへの欲望を抑えられない）
  - = <カラダ>を感じ取れない

- \* 文脈ではなく、「単語」に反応する大学生
- \* 90分間の講義に座ってられない  
どこかへ行ってしまおう自分  
気づくと、記憶がとぎれている  
「ことば」「単語」で還ってくる
- \* 「やった覚えのないテストが返ってくる」
- \* 「これまで自分が自分であったと確信できない、これ  
からも  
自分はずっと変わらず自分だと思えない」
- \* 「幼い頃、お母さんに十分に抱いてもらった記憶がない」

# 3. 心脳コントロール社会に生きる

## (1) 心脳コントロール・心脳マーケティング

変動する社会・将来に希望を持ってない社会は  
マーケティングとしては「心脳コントロール社会」

「心脳コントロール社会」とは、ニーズではなく、  
デマンドに反応させる  
マーケティング手法をとった、管理社会

「なぜ必要か」を問う間もなく、消費へとし向ける手法



## 心脳マーケティング

- \* 人格ではなく、嗜好・嗜癖をデータベース化
- \* 私たちの「感覚」「感性」に働きかける
- \* 一人の人格として「判断」するのではなく、  
一つの器官として「感じる」
  
- \* 「要－不要」ではなく、「好き－嫌い」

## (2) 自我ではなく〈器官〉

このマーケティング手法は、  
私たちの脳を「人間の脳」から「動物の脳」へと  
退行させる

+

発達段階では、  
2歳前後の外部の巨大な力への  
全面的な依存と反発の状態  
が利用される

→ 〈器官〉が利用される

自閉的な循環

→自己愛的

→理不尽な自己主張

→幼児的な反応

→世界に〈他者〉は存在しない

→オンリーワンへの病

→それをあおり、人々を乗せる消費主義的学校

→大衆消費社会における商品としての学校・大学

→感覚・嗜好・嗜癖への働きかけによる支配

+ 言葉の過剰による自己の空洞化

→「解離」「多重人格化」

→「実感」の重視+マッチョ志向+「ボクを見ていて」

= 「自己の嗜癖化」

- お客様としての〈わたし〉
- 商品としての〈わたし〉
- つねに、遍在する神から商品を提供され、  
世界の中心にしながら、  
自分の嗜癖を消費される商品

## 4. 社会全体の解体

近代産業社会 = 国民国家

加工・生産すること + 消費すること

大量の労働力と広汎な市場

民衆を国民化する

学校をとおして、民衆を産業的身体へとつくりあげる

産業的身体：時間(自然時間→時計時間)

身体所作

兵式体操

持続する「自己」

国民としての価値観

言語的統一：国語の制定と強制・矯正

〈わたしたち〉としての同胞意識

市場の拡大

時間軸に沿って、「発達」する

社会・国家・「自己」



価値と時間の管理・支配

## 中央集権国家

1871年 廃藩置県・戸籍法

1872年 「学制」

大区・小区制

1878年 郡区町村編制法

1888年 町村制

学校区と町村が重ねられる

空間的管理

## 1920年代 町村合併と自治会／町内会の組織化

「社会」の誕生

「社会」の区画が自治会／町内会

= 住民の自発的組織

= 小学校区と重なる

= 空間的に重複せず、総和が領土

学校をとおして、住民は国民となる

1985年以降 個性化・個性尊重  
ゆとり教育

1980年代末～90年代初頭 バブル景気  
働き方の転換  
消費社会への転換  
「おいしい生活」  
「欲しいものが欲しい」  
個人がターゲット

画一的な国民としての価値が解体

「市場」が〈わたしたち〉をつくりだし、  
〈わたしたち〉が〈わたし〉をつくりだした  
共通の基盤を持った「わたし」の確立  
これが崩れる

1990年代以降

過労死が社会問題化  
カロースが英語に

ファストフードのアルバイト自給が2000円

コツコツとまじめに、がバカらしい時代

時間軸の崩れ・「発達」の崩れ

価値観の解体

2000年代

急速な少子高齢化・社会の縮小

平成の大合併

→地域コミュニティの解体

→「住民」の不在化

学校と空間的な結合が切断



# 自己責任論と格差拡大

価値観／時間／空間が崩壊

文化 = 社会的な「信頼」の共通基盤の解体

個人がグローバル資本と丸裸で対峙

〈わたし〉 さがし

「不安」 「不信」

「相互承認関係」の切断

KYと空気読み

自己愛

## 5. 人が学ぶということ

### (1) 事後的にしかわからない

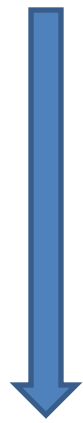
<つながり>をもとにした  
尊厳・生きがい・満足そして社会貢献

内省と事後的な感受  
変わっていく自分にわくわくする

自分を「同時代空間」と「歴史的空間」のクロス  
するところにおきたい

自分が生きている証を感受し、残したい

「学習すること = 自分を感受すること」への渴望



\* 事後的にわかる自分の変化にわくわくする

\* 消費者が商品を選ぶように受講するのではなく、探求することで、自分が変わっていく、その自分を感じることが心地よい

\* さらに、探求したくなる

この循環をどこで回復・形成するのか

## 社会関係資本（親密公共圏）の衰退

- \* 社会を健全に形成する人間関係を基本とした相互の信頼関係の解体  
企業倫理の解体  
金儲けの論理だけが優先する社会へ
- \* 人間関係の解体による人間自身の崩壊  
＜カラダ＞の消失  
正常な身体感覚の消失  
身体感覚に基づく生活感覚の消失  
倫理観の解体
- \* 引きこもり・ニートに多い自律神経の鈍さ  
＜カラダ＞がきちんと形成されないことによる社会性の欠如  
社会性の欠如は、自我の解体を意味する

## 親密公共圏の再構築

人としての尊厳と生きがい、生存の実感を重視する社会の建設  
人々が相互に信頼できる社会の建設

このような社会を親密公共圏または親密公共コミュニティと呼ぶ

このコミュニティに住む人々は相互信頼の基礎の上に、交友を結び、  
相互に尊重し、この関係の中で必要な社会サービスを楽しむ

## オーバーアチーブメントの循環

- \* 「おかげさま」
- \* やってもらってうれしい、ありがたい、もうしわけない
- \* 人様に迷惑をかけたくない
- \* 恩返しをしたい
  
- \* もらったら誰かに返す
  
- \* 自分が変化していることに気づき、うれしい
- \* だから、もっとやりたい

自分の積極性と過剰性を、どう社会の「知」の循環へと組み換えるか



## 「つながり」の感覚

- \* 「つながり」の中で、自分の存在を感じ取り、自分の社会的な存在を肯定できること
- \* 「つながり」の感覚をもつことで、自分が他者との間に存在していることを肯定できること
- \* 「つながり」の感覚が自分をこの世界にいた事実を永遠に刻み込むことができること
- \* 「つながり」の中で生活し、自分を肯定つまり自分を発見できること

尊厳、生きがいと生きている実感、そして好奇心

高い労働意欲と働くことへの要求

カネで買う人間関係から、  
相互依存・相互信頼をもとにした互恵的關係へ

人間関係は「量」の關係（金銭の關係）から、  
「質」の關係（相互承認關係）へ

量の拡大ではなく、質の拡充の時代へ

## 6. 「つながり」をつくりだす社会実験：若者の可能性

M-easy: 無農薬野菜の生産と流通



# やさい安心くらぶ：働く場の形成

## 無農薬野菜



### 名大出身の3人

## 安心お届け

## 移動販売でアピール

相次ぐ食品偽造問題などで食の安全への関心が高まる中、名古屋大学出身の若者二人が無農薬野菜の移動販売をスタートさせた。扱うのは普通は売りにくい形がふぞろいなばかり、農家が自家用に栽培したものを安値で仕入れ、手ごろな価格で売っている。重視する消費者のニーズをつかみ、口コミで利用者が広がっている。

移動販売を行っているのは工学部出身の戸田友介さん(27)、教育学部出身の溝辺育代さん(28)、理学部出身の竹内匡史さん(27)の三人。昨年九月に「やさい安心くらぶ」を無償仕事組合(名古屋市中区)を設立、十二月から始め、現在は名古屋市内各駅や愛知県長久手町など、同市やその周辺四方を回っている。

形はふぞろいだが二つに割れたニンジン、角張ったじゃがいも。軽トラックの荷台並ぶのは形がそろい野菜ばかり。もともと農家が自分で育てたため栽培した無農薬野菜だ。それを安く譲ってもら、スーパーなどで売られているものより手ごろな価格で売っている。人が農薬とかかわりた。これは名生だ。〇〇二年、学内の勉強などで、日本の食料自給率の低下や農家の高齢化、遊休農地が増えていることを知ったのがきっかけだ。BSF(牛糞)を使った土壌改良剤で、安価な肥料で食の安全に対する関心が高まっている。卒業の分、安心安全な食料を自分たちの手で、卒業の余白で、同県弥富市に家を一年間通い、無農薬野菜を販売する。リフトで住宅地を回る無農薬野菜を販売する。名古屋市長久手町

移動販売を行っているのは工学部出身の戸田友介さん(27)、教育学部出身の溝辺育代さん(28)、理学部出身の竹内匡史さん(27)の三人。昨年九月に「やさい安心くらぶ」を無償仕事組合(名古屋市中区)を設立、十二月から始め、現在は名古屋市内各駅や愛知県長久手町など、同市やその周辺四方を回っている。

農薬野菜の栽培方法を学んだ。多くの人にPRでき、〇三年四月には農対面営業で不安を取り除くと考えた。リピーター増「こんな格好な野菜が売れるのか。当初の仕入れ先の農家の心配をよそに、利用者からの評判は上々だ。名古屋市の移動販売所に訪れた同県日進市の主婦(60)は「形がふぞろいながら自然な感じがいい」と褒めている。戸田さんは「丁寧に呼び込みたい」と夢を語ります。

### 振り込め詐欺から年金守れ

振り込め詐欺対策で、全国の警察は現金支給日(三、六、九)のATM周辺などに数万人の警察官を配置し、利用する高齢者に注意を呼びかけるなど、集中警戒を始めた。警察庁は昨年十月に続き、二月を振り込め詐欺の撲滅月間に指定。被害金が引き出されるATMの警戒に加え、電話にたまたま来た

### 愛知は3800カ所に警察官 無人ATMに重点

振り込め詐欺対策で、全国の警察は現金支給日(三、六、九)のATM周辺などに数万人の警察官を配置し、利用する高齢者に注意を呼びかけるなど、集中警戒を始めた。警察庁は昨年十月に続き、二月を振り込め詐欺の撲滅月間に指定。被害金が引き出されるATMの警戒に加え、電話にたまたま来た

も買っていた。リピーターも急増中。口コミで来客は開始当初の二倍に伸びており、多い日で一日百人近くが訪れるという。最近では仕入れ先の農家からも「こんなに売れるならもっと作りたい」との声が寄せられているという。

三人は、年前から同県常滑市に移り住み、遊休農地約一ヘクタールを無農薬野菜の収穫量を安定させる方法を模索する。戸田さんは「無農薬農業で生活できる環境をつくり、多くの若者を農村に呼び込みたい」と夢を語ります。

# やさい安心くらぶ LLP

私たちは安全な暮らしをお届けしたい



IKUYO MIZOBE

## 溝辺 育代

株式会社 M-easy 創設期からのメンバー。やさい安心くらぶでは、“やさいソムリエ”として、お客様に食べ方のアドバイスをおこなう。



### Message

この仕事では、たくさんの人との出会いがあります。仕事を通じて出会った人達と、共に力を出し合い大きな目標にむかっていく、そのプロセスはいつも感動の連続です。

「安心安全な食」や、「人が安心して暮らせる社会のあり方」というと、とても壮大なテーマに思われるかもしれませんが。

しかし、今、「農」を軸にして、食だけでなく、医療、教育、また、ライフスタイル全般に渡って、できることがたくさんあります。

人との出会いのなかで見つかる課題をひとつずつ乗り越えながら、ひとつひとつをよりよいものにしていく、大きなチームがここにいます。その一員でいられることがとても貴重なことだと感じていて、精一杯の力を出していきたいと思っています。

# 過疎地・農山村支援と働く場所の創出

2009年(平成21年)7月16日(木曜日)

富山

富山

## 過疎地域活性化へ 豊田市が初の事業

### 旭地区 農業学び、定住目指す

豊田市は今年度、過疎化が急速に進む地域に定住し、農業に従事してもらう「過疎地域活性化モデル事業」を始める。16日から希望する人10人前後を募集し、同市旭地区の寺や空き家で3年間、共同生活をしながら農業技術を身につけた後、同市の山間地域に定住してもらうことを目指す。定住を最終的な目標とした事業は同市では初めて。

2005年に同市と合併した旭、夢岡、小原、足助、下山、稲武の旧6町村では過疎、高齢化が進み、対策が重要な課題となっている。そのため市では昨年6月現在の高齢化率が39.4多く、旧6町村の中で最も高い旭地区を対象にモデル事業を始めることにした。

参加者は、同地区にある耕作放棄地で今年9月から2012年3月まで無農薬の野菜作りを学んだ後、市内の過疎地域で自立する。農業技術の指導は、名古屋大学の学生が担当し、豊田市の無農薬野菜の生産、販売をしていく「Measy」が担当。

募集するのは、農業に意欲を持ち、過疎地域での暮らしを希望する人。国の緊急雇用対策に基づく県の特別基金を財源に、生活費として月15万円が支給されるため、「求職中」であることが応募要件になる。

同市自治振興課では「意欲のある人に未だ豊田市に住んでほしい。安全、安心な野菜を供給してほしい。旭地区での試みが順調なら、他地区でも行いたい」としている。問い合わせは同課(0565・54・6000)かMeasy(053・2443・3200)。

豊田、真央も私も家に帰って落ち 近藤 元気がなりませぬ。人間

「Measy」が担当。

旭地区では今年に入って、一車での過疎管理、十分な加

東京大学・豊田市・民間企業共同モデル事業

# 日本再発進！ 若者よ田舎をめざそうプロジェクト

農業で日本と自分のあり方を変える。



# 豊田・旭の耕作放棄地で農業

都市部の若者が豊田市旭地区の空き家に住み、耕作放棄地で農業に取り組む事業で、収穫した農作物が29日、市内で初めて販売される。同地区の笹戸町の笹戸会館で開かれる「笹戸温泉じねんじょ・もみじまつり」に新鮮野菜を持ち込む。若者たちは「愛情込めて育てた野菜をぜひ買ってほしい」と呼び掛けている。(杉山直之)

## 初収穫の野菜 初めて販売



収穫した農作物を初めて販売する若者たち＝豊田市太田町で

事業はことし九月に開始。

公募で選ばれた二十代と三十代の男女十人が同地区の二カ所の空き家に住んでいる。十人は荒れ放題だった田んぼを耕して、畑をつくることから開始。九月半ばからダイコンやカブ、ラディッシュなどを育ててきた。栽培だけでなく

## 都市部の若者10人 あすのまつりで

地元の行事などにも参加し、住民との交流も深めている。まつりで売るのは、九月に植え、初めて収穫するラディッシュや、間引きした水菜、大根の葉など。朝採れ野菜の新鮮さが売りだ。

名古屋市出身の北原さとみさん(33)は「販売が、自然豊かな旭地区に足を運んでもらえるきっかけになれば」と期待する。岐阜県大垣市出身の渡辺照見さん(31)も「何も無いところから、収穫までできた。販売は記念すべき第一歩」と話している。

十人は二〇一二年三月まで、農業で生計が立てられるよう技術を学び、都市部へ直接販売するルートの確立にも取り組む。

# 若者たちは田舎をめざした 新人農家実りの秋

公募した若者が山村で暮らしながら、農業を学ぶ豊田市の過疎対策事業「日本再発進! 若者よ田舎をめざそうプロジェクト」で、同市旭地区に移り住んだ10人が農作物の出荷の時期を迎えた。29日には、地元イベントに出店し、ラディッシュなどの野菜を販売する。「自分で育てた野菜を買ってもらえ、うれしい」。若者たちの顔は満足そうだった。

(黄激)

同プロジェクトは、旧合併町村に進む過疎を食い止め、に飛び込んでみたいと小学校都市から農山村への人の流れを生みだそうと豊田市が、東京大学の研究室と無農薬野菜の生産・販売に取り組む県内のベンチャー企業と協力して実施している。書類選考と合宿形式の2次選考を経て、合格した男性7人と女性3人が9月から旭地区の空き家に住み、借り上げた耕作放棄地を使って野菜の栽培を始めた。いずれも20〜30歳代の若者で、県内と県外が5人ずつだった。

名古屋市緑区出身の北原さとみさん(33)は以前に無農薬野菜などを食べて弱っていた体が回復した経験があり、農業を希望したが、見つからな

## 豊田・旭地区の10人 野菜を対面販売



農作業の合間に一休みする渡辺照見さん(右端)と北原さとみさん(右から2人目)ら。移住して3カ月。話も弾む＝豊田市太田町

い。「職種にこだわらずに探そう」と考え始めたころ、豊田市のプロジェクトを新聞記事で知った。渡辺さんは「最初は山村でやっつけけるのか」と思ったが、工場の中の労働しかなかった自分には、太陽の下での土いじりは新鮮だった。やりがいを感じています」と話す。

今月29日に長久手町であったイベント会場に、栽培した野菜を持ち込み、対面形式で初めて売った。若者らは「休耕田を整備し直すところから始めた野菜づくり。お客さんの笑顔に、感激はひとしおだった」と振り返る。

29日には、旭地区で開かれる「笹戸温泉じねんじょ・もみじまつり」に参加し、地元で販売する。ダイコンとカブの間引き菜や、ラディッシュなどを出す予定だ。



## 7. 学ぶことの意味・〈知〉への渴望・〈つながり〉

公共財としての「つながり」

(1) 「想像力」を生み出す

外部経済化されている環境・労働力の再生産を  
市場との接点において、経済に組み込む仕組み

公共財としての環境 = 農業  
公共財としての人間関係・つながり  
商店街・コミュニティ

想像力

「共同体の果てるところ」に市場が形成される  
見えない他者への想像力  
「商品」の背後にあるもの = invisible asset への想像力

相互に承認し合うこと

信頼しあえること

〈わたしたち〉であることが  
〈わたし〉であること

大学

学ぶことで〈わたしたち〉を生み出すところ

学びのオーバーアチーブな関係をとおして、  
相互信頼／相互承認関係をつくりだす

〈学び〉 〈知的好奇心〉 〈知への渴望〉 が共通基盤